

「看護の将来ビジョン」

団塊の世代が75歳以上となる2025年には、さらに少子・超高齢社会が進み、疾病や障がいを抱えながら生活する高齢者が増加すると推測される。そのような状況において、看護はどうあるべきか。日本看護協会は、2025年に向けた看護の将来ビジョンを策定した。どのような健康状態でもその人らしく暮らしていけるように、「いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護」を目指している。

そもそも看護は、“疾病”をみる「医療」の視点だけではなく、生きていく営みである「生活」の視点をも持って“人”をみることに専門職としての価値をおいてきた。従来からの予防・自立支援・人権尊重の視点を大事にしつつ、医療の提供と「生活の質」の向上という二つの機能について、充実させていきたいと考えている。

人々が健やかに生まれ育ち、健康に暮らし、緊急・重症な状態から回復し、住み慣れた地域に戻り、疾病・障がいと共に暮らし、穏やかに死を迎えるまで、人々の生涯にわたり、様々な場面で、保健師、助産師、看護師は支援する。その活動は、地域の多機関、多職種、住民などと連携し、生活と保健・医療・福祉をつないで行うことになる。

例えば、保健師は、健康寿命の延伸に向けて、データヘルス計画の推進、生活習慣病

の予防・重症化予防、また認知症の方を支え合う地域づくりなど。看護師は、在宅医療・介護が必要な状態でも不安なく退院できるように療養指導や退院調整をし、訪問看護ステーションや看護小規模多機能型居宅介護等で支えるなど。

10月に「特定行為に係る看護師の研修制度」が開始される。医療的判断能力と技術を強化した特定看護師が増えていくと、医師が身近にいない在宅などで、医療上の不安が軽減され、医師等との連携のもと、より長い期間、多くの在宅療養者を支えることができるようになることを期待している。

看護の将来ビジョンを達成するには、地域で活動する看護職を増やし、暮らしの場における看護機能を強化する必要がある。また、「いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護」を実践する質の高い看護人材の育成に向け、教育・研修制度の整備が必須である。さらに、看護職が働き続けられる環境を整備し、看護人材を確保することも必要である。そして、質の高い看護実践を支える研究が俟たれている。

公益社団法人
日本看護協会
副会長
菊池 令子

◇ PROFILE 菊池 令子（きくち・れいこ）

公益社団法人 日本看護協会 副会長
 東京大学医学部保健学科卒 東京大学医学系研究科修士課程修了（保健師・看護師・保健社会学修士）。
 日本看護協会調査研究部等を経て、1998年日本看護協会常任理事、2006年日本看護協会専務理事、2012年より現職。
 厚生労働省「社会保障審議会医療部会・医療保険部会」「看護職員の需給見直しに関する検討会」委員など。